

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌
 住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1
 柿生中学校内
 電話:070-1503-6401,044-988-0004
<http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo>
 第98号

外国人が知っていた「日本」とは(4) 近世(江戸時代)

===鎖国の中での日本の印象は===

前回の安土桃山時代の日本は、スペイン・ポルトガルのカトリック宣教師や貿易商等による実体験に基づいた記録がもとであったため、記述内容が大変具体的なものでした。

江戸時代に入り17世紀半ば頃、鎖国が完成すると、西洋からの情報は、「オランダ風説書」等が中心で、逆に日本人の生活習慣などは、オランダ東インド会社一行の江戸参府の随行員の記録などから当時の日本人の姿を知ることができます。例えば、ドイツ出身の医師ケンペルはオランダ東インド会社の医師として、1690年から1692年の間に2回の江戸参府を経験しています。当時は5代将軍綱吉の時代で、将軍にも直接拝謁し、ドイツ・オランダの歌や踊りを披露したり、長寿の薬について訊ねられたりもしました。これらの出来事は「日本誌」という著書に書かれ、当時の日本人の生活や街道を旅する人々の姿も生き生きと描かれています。ケンペルは「日本が鎖国をするのは理があり、国民は平和に暮らしている」という大変好意的な表現で紹介しています。この著書はやがて、長崎通詞(江戸時代の通訳)の志筑忠雄が一部を抜き出して翻訳し「鎖国論」の名で広く日本国内にも流通されました。

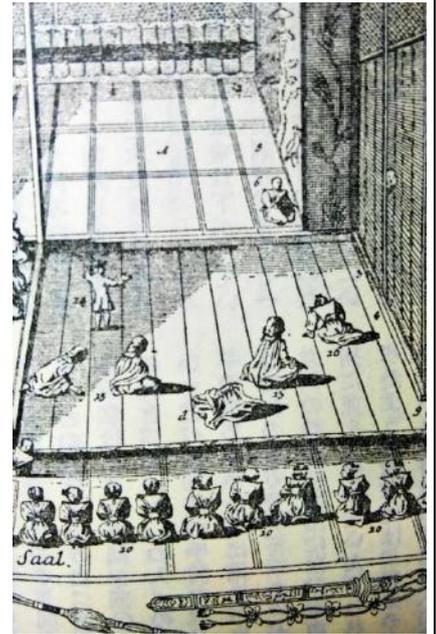
また、同じく東インド会社の医師として1775年日本に来たスウェーデン人のツウンベリーはその著「日本紀行」で「日本人の国民性については、礼儀正しく器用で節約好き、清潔、親切、善良、正直。しかし迷信深く、高慢で自分たちが他の人種より優れていると信じ込んでいる。きわめて執念深く復讐の機会を狙う」と長短極端な見方があります。執念深さについてはよく欧米人から指摘されますが、これは、武士の間で行われていた仇討の事だと思います。

さて、この時代には空想的な旅行記も多く書かれています。例えば、イギリスの著作家デフォーの「ロビンソン・クルーソー」(1719年)には「(前略)賢明な共同経営者は私の日本行きを思いとどませようと私を説得した。(中略)日本人は嘘つきで残酷で陰険な国民だ。さらに、フィリピン群島にいるスペイン人にいたっては日本人よりもっと嘘つきで残酷で陰険だとのことであつた」と書かれ、かなり厳しい評価です。一方、アイルランドの風刺作家スウィフトの「ガリヴァ旅行記」(1726年)には、ガリヴァは日本の東端の港ザモスキ(観音崎か?)に着き、江戸で将軍に謁見。踏み絵の儀式を免除してほしいと申し出ると「踏み絵を躊躇するオランダ人を初めて見た」と不審がられた事が書かれています。広くヨーロッパにも日本の「踏み絵」が知られていたことが分かります。この2点の作品はもちろんフィクションですが、基になる資料が存在してそこから引用していたようです。

幕末期になりますと日本の開国に伴い多くの西洋人が日本を訪れその感想を書き記したものが残っています。この当時から登場した写真は西洋人の多くが、アジアの果てにある日本の異質な文化に強い関心を持ち始めるきっかけとなりました。イギリスの外交官で初代駐日英国公使であるオールコックが書いた「大君の都」には「日本は東洋の他の国に比べればかなり進歩しているとはいえ、社会制度の面ではイギリスの12世紀頃の状態」「本質的に下劣な官能生活」と強烈な批判をしながらも自然の美しさや工芸品には感嘆しており、日本の若い女性の美しさは来日西洋人の誰もが絶賛しているとも書いています。日本の良さを認識しながらも攘夷運動が盛んであつた幕末期の日本はまさに西洋人にとっては受難の時代であつたことも彼の記述から伺い知ることができます。

左の写真は1837年にフランスで発行された「マガザン・ピトレスク誌(絵入文庫)」の中で日本について紹介されたある日本人の肖像です。この時代のフランス最初の日本についての同時代情報です。この男性の姿は、どう見ても日本人ではなく中国人です。大量の日本情報が流れていると思われるものの実際はかなり間違えた情報が当たり前のように流れていることがよく分かります。

(文:板倉敏郎)
(参考資料:「マガザン・ピトレスク」1837年、「江戸参府旅行日記」ケンペル、「外国人が見た近世日本」)



将軍綱吉に謁見するケンペル (立っている人)



江戸後期のフランス人が考えていた日本人

シリーズ
「麻生の歴史を探る」 第 68 話

北条氏関東支配 (1)～小机城

小島 一也 (遺稿)

戦国大名北条氏の始祖伊勢宗瑞(新九郎長氏・早雲)の出自は明らかではありませんが、駿河の守護今川家の縁者であったようで、文明八年(1476)今川家の内紛を調停し、明応二年(1493)伊豆堀越公方の家督争いを解決して伊豆韮山に城を構えますが、今川家内紛を収めた陰には、関東管領上杉定正が派遣した太田道灌の調停もありました。この時、早雲、道灌ともに45歳だったといわれています。

それから10年後の文明十八年(1486)道灌は主君定正の策謀で悲運の死を遂げ、早雲はこれらの功で駿河十二郷の興国寺城を与えられ明暗を分け、明応四年、早雲は道灌亡き後の扇谷上杉配下の小田原(大森氏)を奪い、続いて永正九年(1512)相模平塚の岡崎城に三浦一族を破ります。さらに早雲は、太田道灌という統率者を欠いた当時の相模国の守護扇谷上杉家を相模国外に追放し、実質的な国守となり、三浦、鎌倉も領内に収めて、焼けた鎌倉八幡宮の造営を行っていますので、扇谷、山内両上杉家の確執に乗じ、駿河の今川勢を率いて生田柘形域に進出してきたということは、武蔵国盗りの第一歩だったといえることができます。

その伊勢宗瑞(新九郎長氏・早雲)が没したのは永正十六年(1519)、武蔵国盗りは進んでいました。家督を継いだのがその子氏綱で当時32歳、父早雲に劣らぬ武将で、北条氏(後北条氏)の関東支配、北条政権はこの氏綱から始まります。その政務の始まりが、伊勢氏から北条氏への改姓と印判状(文書)の発行です。改姓の理由は、かつて鎌倉時代、武蔵・相模の守護は北条姓で、守護は北条姓であるべきという理論で、戦国大名が割拠のこの時期、多分に鎌倉北条家を意識しての改姓で、その時期は永正十五年(1518)頃とされます。一方、印判状は戦国大名の印判状制度の創始と言われ、「虎の印判状」として知られるこの多様で多量な文書は現在貴重な歴史資料となっています。

したがって前稿享禄三年(1530)、氏綱の子、氏康の小沢ヶ原の初陣の頃は、この地方は北条氏の領域であったということで、氏綱はこの頃「北条左京大夫」の叙爵を受けています(近衛関白日記)。こうして名実ともに相模・武蔵の守護となった氏綱はかつての鎌倉公方や関東管領の室町体制を打破、戦国大名として新しい領国経営に乗り出しますが、その中心となるのが小田原城で、この地方に北条氏は治世防衛の拠点としていくつかの城を新築します。その主城となるのが小机城(横浜市港北区)で、この小机城は北の江戸城、西の八王子城、南の玉縄城と共に小田原城を支える重要な城で、城代笠原信為(早雲の伊豆以来の忠臣)が没すると、氏綱は甥の北条三郎を城主とし、続いて永禄三年(1560)氏康の弟氏堯(うじたか)を城主にしていますので、北条氏にとってこの城は重要だったのでしょう。

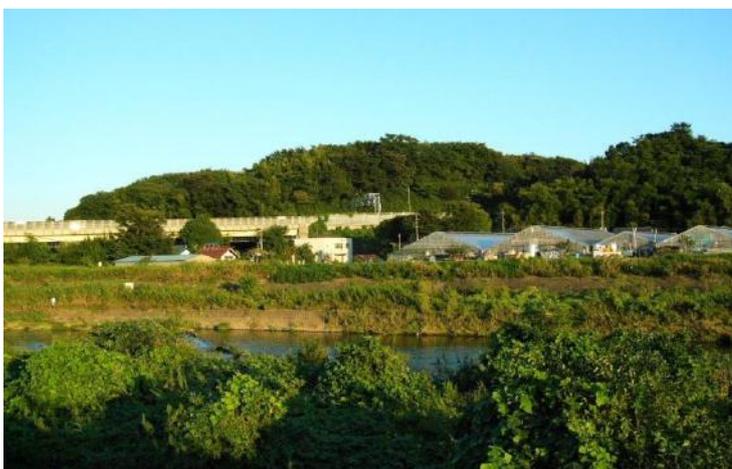


小机城の位置

この時期、この城の領域は、ほぼ武蔵の橘樹郡、都筑郡の地域で、現在の川崎市川崎区(江戸城領域)を除く全

市域と、現横浜市の北半分(鶴見、神奈川、保土ヶ谷、港北、緑、青葉の各区)に及ぶ広大な地域だったようです。この頃この小机城や支城を支える武士(家臣団)を小机衆と呼び郷村の支配は小机領、小机庄となっていくます。戦国大名領国支配の目的である検地(年貢を得るための田畑面積調査)に、小机衆という地殻変動に多少の戸惑いを見せながらも各村で行われ、天文十二年(1543)麻生、黒川での検地資料(川崎市史)が今に残りますが、それは、小机城を主とする北条氏治世の表れともいえます。

参考文献:「川崎市史」「横浜市史」「戦国大名北条氏文書」「神奈川県城」(図、写真は編集者挿入)



小机城址遠景 手前は鶴見川

シリーズ

時間と時計の話 第2部

時計と時間の観念(4)

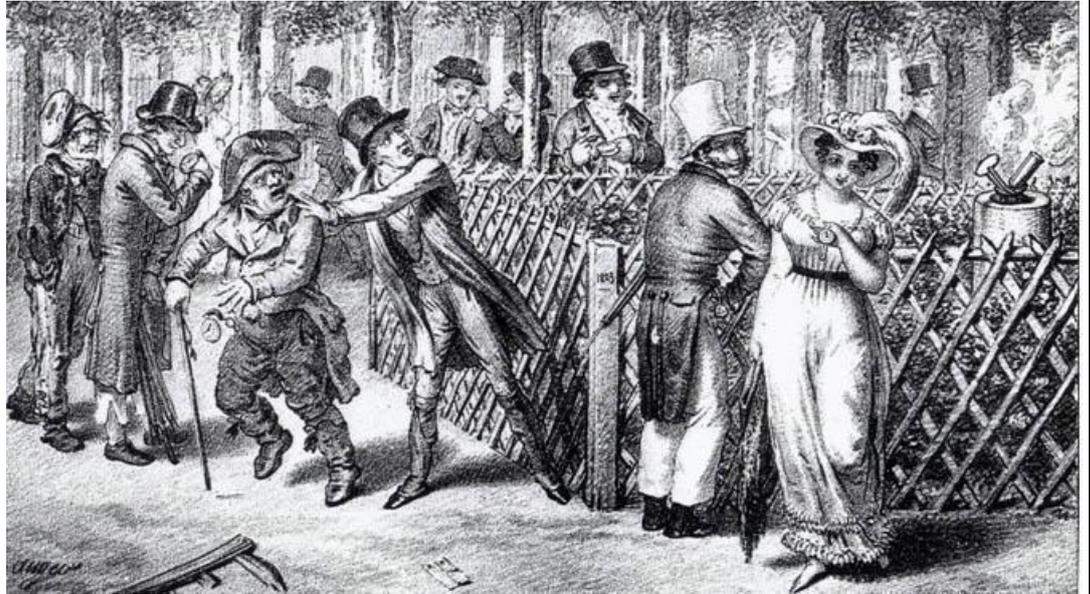
小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

◆時刻と時間の約束◆

工場制度の揺籃期、工場で働く労働者は、自分の労働力を資本家を買ってもらい、いくばくかの賃金をもらって自らの生活を支えます。労働者が団結して労働組合を作ることもまだ認められていない時代ですから、資本家と労働者の関係は、圧倒的に資本家に有利で、労働者に不利でした。当時は朝の出勤時間に5分遅れただけで、日給の半分か減らされたのです。ですから、労働者にとって、朝の始業の時間に遅れないことは、死活的に大事なことです。「今何時か?」を知ることは、高級な懐中時計を手に入れることなど、とても考えられない工場労働者にとっても、欠かせないことだったのです。こういう環境が生まれたがゆえに、時間の約束が物語のキーになっている『シンデレラ』の物語が、19世紀初頭のヨーロッパ世界に受け入れられ、今日に語り伝えられたのです。

◆標準時の誕生◆

右の絵をご覧ください。この絵は、ジャン・アンリ・マルシが1823年に描いた、『パレーロワイヤルの子午線』と題する石版画(部分)です。パレーロワイヤルは、当時のパリ最大の盛り場でした。マルシが描いたのは、その一郭にある庭園の情景です。画面には懐中時計を持つ人物が5人も描かれています。画面の右隅には囲いの中で煙を上げている大砲が見えます。実はこの大砲は、太陽



の南中時にドンと大きな音を出す仕掛けになっているのです。何故か。実はパレーロワイヤルのこの場所は、パリ天文台の大広間の真ん中を通るパリの基準子午線の真北にあたるのです。即ち、パリの標準時子午線の同一線上にあるのです。そこで、パリ市はこの場所に、レンズを組み込んだ特殊構造の日時計を設置し、太陽の南中時にレンズを通じて、太陽光線が大砲の火口に集まるようにしたのです。こうしてちょうど正午の時間に、詰めた火薬に火が着き、ドンと大きな音が響き渡るのです。まさに午砲です。

ですから、懐中時計を持つ人々は、この音を聞くと、自分の時計を12時に合わせ、時刻の狂いを調整するのです。この絵の中では、退役軍人の持っている時計だけが全くのまがいもので、実用の役に立たない物のようですが、きらびやかな女性を含む他の4人の時計は、いずれも正確に時を刻んでいるようですね。

マルシのこの絵から分かることを整理しておきましょう。まず1820年代の前半には、既に精巧な懐中時計を作る技術が確立していたことが覗えます。また、当時のパリ市民の間で、標準時という考え方が、次第に市民権を得つつあったことも確認できそうです。現在の時刻制度では、たとえば日本をとれば北海道でも沖縄でも同一の標準時を使っています。しかし当時の社会にあっては、どこでも夫々の太陽の南中時を正午(12時)としていました。それで不都合なことはなかったからです。ですから、パリやロンドンといった大都市では、市内にいくつもの異なる正午が存在したのです。異なる都市となれば尚更でした。

そうした状況に変化が生じつつあることを、マルシの絵は示しています。「午砲」の存在は、太陽の南中時という場所によって不揃いな時刻制度を、一本の標準時に統一する構想が生まれていたこと、パリ市民の一部が「午砲」に時計を合わせることによって、標準時を身につけつつあったことなどが、読みとれます。

それでは、現在に繋がる広い範囲を包摂する標準時は、何故必要となり、どのように誕生したのでしょうか。ここではまず、何故懐中時計が普及することになったのかを見ておきましょう。教会の時計塔から市庁舎の時計塔へと記しましたが、19世紀の30年代から三つ目の時計塔が登場します。それが鉄道の駅舎の時計塔です。スチブソンの蒸気機関車を利用した世界最初の鉄道が、イギリスで開業したのは1825年(日本では天保元年)のことでした。北部の工業都市マンチェスターとビートルズの誕生地で港湾都市のリバプールを結んだ鉄道です。当初はこの区間を時速30kmという、当時としては驚異のスピードで走ったのです。この鉄道が嚆矢となって、その後僅かの間にイギリス全土に鉄道網が張り巡らされます。こうなると、当時の上流階級の人々は、狭い馬車に揺られて何日もかけて目的地に行くより、馬車は御者に運ばせておいて、自分たちは鉄道で目的地に向かう方が、ずっと快適です。上流階級の真似をしたい成りあがりの新興階級や、多少ゆとりが生まれ、日帰りの汽車旅行程度なら楽しめる中産階級も鉄道の利用を始めます。事情はイギリスの技術を導入して、鉄道建設を進めたフランスやドイツでも同じでした。しかし、ここで困った問題が起きたのです。

(続)

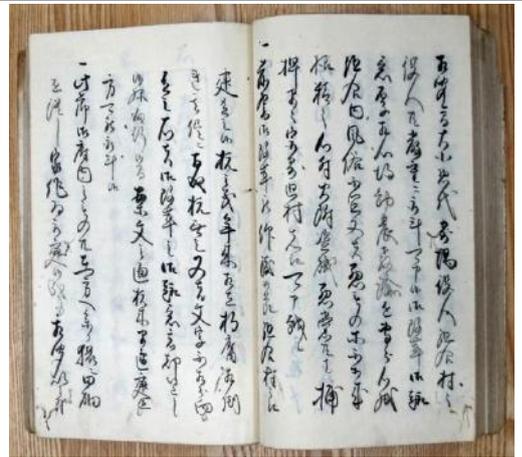
第4回史料館古文書講座開講

通算4回目となる古文書講座が5月26日に開講しました。最終回の11月10日まで10回の予定です。継続の方、新規ご加入の方を含め、25名の参加をいただきました。特に新規の方が9名おられ、古文書に対する関心の高さを物語っています。

4回目ともなると、参加者のレベルもかなり上がってきていますので、講座というよりは輪読会の性格が強くなっています。参加者全員が講師となり、お互い切磋琢磨してさらに実力を高めていただく場となれば幸いです。

教材は前回同様志村家文書から取っていますので、併せて江戸時代末期の王禅寺村の実情を学ぶよい機会にもなると思います。

会場がやや手狭で恐縮ですが、最後までお付き合いのほどよろしくお願いたします。



柿生郷土史料館催物案内 【入場無料】

◎開館日:偶数月は毎土曜日、奇数月は毎日曜日 (原則として月4回)

7月 3・10・17・24 日(毎日曜日) **8月** 6・20・27 日(毎土曜日)

◎開館時間:午前10時～午後3時 (8月13日は休館です)

サマースクール

瓦板作りに挑戦しよう ～木版画でイラストを作ろう

日 時 平成 28 年 7 月 24 日(日)午後1時から約 3 時間

会 場 柿生中学校 金工・木工室

講 師 版画家 浅野新一氏 (王禅寺在住)

対 象 小学4年生～中学3年生

参加費 1名につき 500 円 (教材費等の実費、当日徴収)

持ち物 彫刻刀、上履き、飲み物(ペットボトル可)、タオル、エプロン

申し込み 氏名、学年、学校名、連絡先電話番号と FAX 番号またはメールアドレスを記載して、下記までファックスまたはメールで申し込んで下さい。

申し込み先 小林 044-989-0757(FAX 専用) または zabi@za.wakwak.com

締め切り 7月5日(火) ただし、定員になり次第打ち切ります。

問い合わせ 柿生郷土史料館企画担当

小林基男 080-5513-5154 または 044-989-0622 まで



ついに完成!

ふるさと柿生の記憶を DVD 化

第1弾

「身近にあった信仰の世界と人々の思い」

◆◆◆晩秋の上麻生「秋葉講」を訪ねて◆◆◆

ご希望の方にはおわけしております。詳しくは史料館までお問い合わせください。

柿生郷土史料館友の会へのお誘い

柿生郷土史料館では友の会への入会を常時受け付けております。手作り史料館に参画しませんか。会員には「柿生文化」の送付や各種イベントへの優先受付などの特典を用意しております。この機会にぜひ入会をご検討ください。

詳細は直接当館にお問い合わせいただくか、ホームページをご覧ください。